一橋論叢　第二十六卷　第一號

根岸佶博士著『上海のギルド』

內田直作

一

根岸佶博士本學御退官後古稀のとき「中國企業形態合股の研究」と「華僑雜記」（昭和十八年刊）、つずいて「中國社會の指導層」（昭和二十三年刊）「買辦制度の研究」（昭和二十四年刊）、さらに昨年喜壽に際して「上海のギルド」を完成され、本年四月その刊行をみた。華僑雜記を除けば何れも浩瀚の書、篇迫した出版事情から中國社會の指導層は折半され、最近刊の上海ギルドも三分の一に壓縮されている。先生の老來ますますさえゆかれる健筆、奔流のごとき研究意欲、加うるに七十八の御高齡にもかかわらず昨今いよいよ快調にあられる御壯健振り、まことに學界稀有の盛事というべく、ここに謹んで御祝詞を呈する次第である。

このたびの勞作「上海のギルド」は本來千二百頁にも達すべきものであつたが、四百頁餘に壓縮されて、總說のほか上海における寧波ギルド、海寧ギルド、錢莊ギルド、上海銀行公會、米業ギルド、繭、絲、綢業ギルド、手工帮としての建築業ギルド、上海市商會の八つの主要團體が取扱われている。

先生の舊著「中國ギルドの研究」では、實態的には上海の寧波ギルドのうち四明公所、米業ギルドのうちの嘉穀堂公所と同鄉團體としての徽寧思恭堂の三團體を取扱われたが、本書では擴大されて前揭の包括的な八團體につきそれ等の原資料、すなわち碑記、徵信錄、緣起、章程、會員名册等に基づいての實態分析が展開されている。時期的には清末から日華事變勃發前にいたるまで自由と秩序の保持された租界内において順調な發展をとげてきた主要な中國民間商工團體の協同自治の生活記錄が精密に跡づけられている。國内各地に軍閥官僚の跋扈をみ、それ等相互間の政權爭奪が涯しなく繰返えされ、國家機構の確立に困難を重ねてきた中國にあつて、民間がギルド的結束のもとにいかにその間を切抜けてきたかはきわめて重要な問題ではあるが、その實態調査は日本人には相當の便宜手段に憑まれていたにもかかわらず閑却されていた。比較的この方面に理解を以て着實に觀察してきたのはイギリス人であつて、マックゴワン、モース、バーヂェス、ピッカーリング、スターリング、シュレーゲル等の輩出をみた。日本では獨り博士が世評に超然として六十年に垂とする研究生活を閑却された中國ギルドの究明に埋沒され、一日として倦み撓ゆまれることなく今日に及ばれた。今、ここにその貴重な研究成果の一部である「上海ギルド」

について敢えて紹介させて頂くこととした。

二

まず總説の冒頭では、ギルドを以て血縁でないものの間に相互の生活を保護するための組合とされた年來の自説を改められ、中國のギルドは血、地、兩緣と微妙な關係があつて、これを單純な目的團體とみなしがたいと改められたことである。すなわち、從來は西歐學者ブレンターノ等と同樣ギルドを擬家族的團體とされ、血緣關係の介入を排斥されていたのに對し、改めてそれを導入されたのである。だが、本書ではとくに地緣關係を基軸として純然たる同鄉團體、地緣と業種の結合した同鄉同業團體、さらに地緣關係の薄れた同業團體の三團體の範疇を明らかにせられる。時期的には清末から國民政府時代にわたる中國ギルドの概括的な觀察がなされる。すなわち、同期間內亂の波及から保護された租界內において商工業の發達とギルドの興起をみたこと、ついで清末の變法自强以後流入してきた西歐の法制、學術思想等によりギルドもまた外來の資本主義、民主主義、民族主義を攝取して、中國の傳統に融合せしめ、特殊の面目を具えたとされる。上海ギルドは商會を最高位に銀行公會、商業ギルド、手工業ギルドの順位に、またその內部構成は領袖と平會員の區別あり、位階體統的であり、かつ會長その他董事には推薦制、時としては世襲制もみられる。かかる傳統的な構成から國民政府成立後は選擧制・委員制・多數決制等の民主主義的構成が移植され、國民革命への資本的參加による民族主義的自覺、會社組織による資本主義化、階級鬪爭の發生、ギルドの主要職分である宗教服務の減退等ギルドの時代の進展に伴う諸變化を展開される。すなわち、工商同業公會・商會等の新組合が洋式組合の形式を採用しても、なおギルドの傳統的構成を保持し、最新團體としての上海銀行公會のごときも漸次的にかえつてギルド的結束を强化するの實情にあつたことを主張され、傳統的骨格を尊重するものが中國では實情に妥當して急速な發展と成功を收めるとされるのが、博士の立論の骨子となつている。

三

第一章「在上海寧波ギルド」では、舊著と同樣四明公所と寧波旅滬同鄉會が取扱われるが、とくに後者につき最近の事情にいたるまで擴大觀察され、さらに寧波幇といわゆる浙江財閥との社會經濟的關連性が附說される。まず、四明公所が寧波幇の世家方氏一族により創設され、ついで寧波旅滬同鄉會が、料理人あがりの沈洪賓によつて附設され、貴族的構成から民衆的構成へ轉換していつた。すなわち、そこで特徵的なことは公所の創設に預つて力あつた方氏一族が世家として現實的企業活動から遠のき、公所でも名譽的地位に止まるにすぎない反面、庶民階級あがりの經理層によつて、公所や同鄉會の運營が推進され、政治的に全面的な反官運動の展開される場合にもこれ等の氣骨

稜々たる經理層の領導するところであつたことである。

國民政府の資金的背景として登場した浙江財閥につきそれが漸次地緣的結合關係を喪失した新中國資本團と稱すべきだとの志村氏說に反駁されて、浙江閥の中心は寧波幇であるとの獨自の見解を述べられる。

第二章では杭州府屬海寧縣の上海における同鄉團體上海海昌公所の沿革、組織、機能について同公所の徵信錄に基づいて記述される。同公所は上海における海寧縣出身の有力生絲商人により創設されたものであつて、その創設の契機は疫病流行による同鄉出身者の多數の棺柩の保管と鄉里への歸葬を必要とすることにあり、多くの公所創設事情と相共通するものであつた。

公所は百五十名前後の會員により維持經營されるが、その主要事業である丙舍、義塚の利用についてはひろく同鄉人乃至は同鄉人の紹介あるものに開放される社會的なものであつて、公所員のためのみの封鎖的なものでないことが理解される。さらに、そこで興味あるのは公所成績彙記において親戚故舊のための情實のからまる官治の失政非道に對し民間商人が負擔と危險を顧みず公所機關を通じ輿論をバックとして勇敢に抗爭する過程が如實に例示されている。中國の商人社會の氣骨が官僚專制政治のもとに屈伏せしめられず保衛鄉人のため力爭したことが明らかにされている。

第三章では、上海錢莊ギルドが取扱われる。錢莊ギルドの起源については北宋の交子ギルドが定說になつているが、博士は爲政九要の記事からして唐宋の櫃坊がその起源でないかとの新說を明かにされる。ついで、今日の錢業公會の沿革を詳述され歐米式の組合化した公會においてすら、交子ギルドとほとんど異るところなく、中國傳統の惰力の根強さを指摘される。本章で問題となるのは一般に錢業は對人信用を基礎とするといわれ、莊票について名目主義的貨幣觀念が支配するごとくにも理解されがちであるが、上海事變後創設された上海錢業連合準備も危急に際しては八千萬元に上る財產現銀を積立て結局は物的信用の基礎の上に立たざるをえなかつたことを立證するものではなかろうか。なお、中國のみにみられる銀行券領用制度も中國金融機構の個別主義的なギルド的構造をより有力に根據づける點において附說されたらば錦上花を添えたと思考される。

第四章は百業ギルドの王座を占める上海銀行公會についてであつて、その沿革に關しては一、孤立分散時代（一八九六——一九一四年）、二、自主自律時代（一九一五——一九二七年）、三、國民政府統制時代（一九二七——一九三二）、四、ギルド性强大化時代（一九三二——）の四期間につき分說される。右の四時期にも明らかにされる通り、洋式組合を模して設立された銀行公會がその盛大に赴くに伴い、かえつて傳統的なギルド的結束をつよめるにいたつたことを力說される。

ついで、銀行公會內部の帮別構成を檢討され、政府銀行の成立後も依然として定說とは逆に浙江財閥の優位性すなわち地緣的要素の殘存を認められる。さらに銀行公會が天降的法令にの

み制約されないで相互間の協同自治が困難に遭遇するたびに強化され、上海事變後には聯合準備委員會が設置されたこと、その他協同事業としては、上海公棧、票據交換所等の諸施設につき說明される。そこでは省略されているが、北派四行の聲名を馳せた四行儲蓄會、四行信託部等の政治資本とは結托しないで、どちらかといえば多少ながら產業資本ともつながりのあつた協同事業の盛大に赴いていたこともギルド的結合の將來を卜するために大きな意味を有するものではなかろうか。

銀行公會が漸次ギルド的結束を固める一面、特徵的であつたことは舊式銀行の錢業と銀行との人事交流が緊密となり、漸次銀錢業の協同をみるにいたつたことである。博士はその場合天津の場合と同樣銀錢業一體化した合一公庫の發生すら可能であると推測されている。日華事變の勃發後は銀錢業同業會員連合委員會の設置をみ兩業會庫は上海金融市場の安定のみならず、奥地への游資移動、農業貸付等にも緊密な協同歩調をとり、同樣の傾向は上海のみならず、香港にも銀錢業協議會の成立をみていたから博士の推測は的中されたといつて差支えない。

第五章の上海米業ギルドに關しては、舊著では米店ギルドである嘉穀堂公所についてのみ記述されたが、本書では上海米業市場の綜合的觀察がなされている。すなわち、客幇のうちの漢口幇志成堂公所、嘉穀堂の後身としての米號業同業公會、北市買手中立人（經售）組合の經售米糧業同業公會、一般仲立人組合の豆米行同業公會、上海における雜糧市場を經營する華商雜糧油豆餅同業公會等について餘すなき觀察がなされ、各米業組合のギルド性が明確に摘出されている。そこに明らかにされる傳統的市場秩序は嚴格な官治的統制や放漫に流れた自主的規制等幾多の試練をへた上での歷史的所產であるだけに、今後中共政權治下においていかなる變革が加えられうるかは米行以外の牙行制度問題一般とも關連して興味深いものがある。

第六章では日本生絲、人絹等との競爭により海外市場を喪失し、沒落過程を辿つてきた繭、絲、綢三業ギルドについてあらゆる角度から檢討が展開される。まず、繭行を中心とする繭業ギルドが取扱われ、繭行が綢業者や養蚕農家を屈伏せしめ亙商大官に拮抗しえたのはギルドの結成によるものとされ、無錫、紹興における繭行公所、上海における江浙皖絲廠繭業總公所について實證される。

第二の絲業ギルドについては、上海の絲號（生絲問屋）の組織する絲業會館の沿革につき明らかにされる。咸豐十年（一八六〇年）創設された同會館の緣起に「浙江巡撫王氏の浙江に官たるや多年云々」とあり、當時長崎に生絲を船載して日本銅の買付にきた官商は王氏であり、ここに例證の餘裕はないが、その他の文獻からしても辦銅の官商王氏は浙江巡撫王氏であるとの根據が深められる。

第三の綢業ギルドの中心は綢莊（絹織物問屋）であつて、とくに生產者側の絹織物製造に從事する機戶との對立鬪爭につき、杭州の事例につき說明される。すなわち、本章で問題にな

るのは生産者もギルドを組織すれば商人支配を脫しうることである。さらに、一般にギルドは水平的な結合であるが、繭、絲、綢業各ギルド相互間に對立することなく、垂直的にも大同團結するのでなければ外商との競爭に拮抗しえないではないかとの見解を呈示される。

第七章では手工帮の歷史と職能を概說され、舊著では河北や景德鎭の窯業と苦力帮が取扱われたのに對し、本書では上海建築業ギルドが新しくとりあげられている。國民政府成立の前後から勞資の對立となり、作頭職人等は工會、資本家側は同業公會を組織した。かかる階級對立に導いた主要要因は歐米資本主義の進出であり、排外的な動機から資本主義化するに努めた結果とされる。その場合の勞資對立にも前期的なギルド的傳統が交錯し、歐米的なそれとは相違するもののあつたことが明らかにされる。

第八章上海市商會ではまず沿革として清末政府側の企圖にかかる商務局から商業會議所、舊商會、北伐完成後の改組による新商會にいたるまで、西歐諸國、日本等とは逆に特異的な發展、すなわち一大近世的ギルドを完成せしめたことを跡づけられる。なお、市商會のほか全省乃至は全國の商會連合會、國民黨容共時代の產物の商民協會について附說される。そこでは前章の勞資對立と同樣プロレタリア組織である商民協會の領導層が市商會のそれとも共通し、容易に傳統的要素が拂拭されえない傾向が汲みとられる。

四

最後の第九章中國ギルド研究問題では結論として次の三點につき論述される。

一、中國ギルドの實例に徵し、東西文化融合の可能なること。

二、中國ギルドは民主主義の樹立に寄與しうること。

三、中國ギルドは近世國家建設に貢獻しうること。

第一の見解に對しては博士は歐米的な商工同業組合乃至は商業會議所と中國傳統のギルドとの結合において中國人に調和の國民性あることを認められる。さらにそこでは回避されているが、中共政權の成立後これらの商工團體がいかに取扱われるかの問題がのこる。有力ギルドは封建的結社として禁壓されてゆくであろうが、他面ソ連を經由して輸入される西歐の組合思想がどのように接穗されゆくか、おそらくは下からの發意による自由結合ではなく、上からの命令系統による委員會制、かつての商民協會型が再現されるのではなかろうか。その場合にも傳統的要素がどのような役割を果すかは博士のいわゆる東西文化の融合に關連して重要な問題である。

第二の見解に對してはギルドは封建的でこそあれ果して民主主義的であるかとの反駁もでそうであるが、設立當初の股東的世家の貴族的支配から漸次經理層の擡頭となり、會長制から合議委員制へと發展し、かつ各ギルド相互間の大同團結により民主主義的傾向を深めてきたことは本書を通じて觀察されるとこ

ろである。この點、中世イギリスの商人ギルドが當初の民主主義的構成から漸次貴族的寡頭支配に硬化していつたこととはまさに逆であり、かえつてヨーロッパ大陸型ギルドの發展傾向と共通するものがみられるのではなかろうか。

第三の見解では右の大同團結性からして近世國家建設の可能性のあることが導きだされ、一方その實現の阻止された原因を東方的專制主義の官僚政治に求められる。すでに清末の變法自强說出現以來民間商工團體の育成保護へと轉換し、かつ租界内の安定的經濟生活からしても本書に取扱われたごとき上海ギルドの驚異的な發展をみた。なお、本書では取扱われなかつたが、國民政府は國民大會組織法の制定に際して區域選擧のほか、とくに職業選擧を認め、農會、工會、商會、同業公會、その他自由職業團體からの代表者選出せしめる組合議會の構想をさえとりいれ、民主主義政治實現の方向へ動いていた。だが、その場合にもなお國民黨中央執行委員、中央監察委員は無選擧で代表たりえることからして、官僚政治の制壓の殘存をみていた。また、中共の中國人民政治協商會議は政治的團體である民主黨派、民間團體である人民團體の代表によつて構成されている。その場合の人民團體は工會や農會に重點がおかれてゆくであろうが、天降り的にせよ、自發的にせよ、民間團體が政治的黨派と相ならんで政協の基礎として重要視されていることは注目に値する。さらに、今次戰爭中には奥地經濟建設に工業合作社が重要な役割を果したのみならず、中共のいわゆる五種經濟（國營經濟、合作社經濟、農民手工業者的個體經濟、私人資本主義經濟、國家資本主義經濟）においても新式協同組合の合作社經濟が重要な地位を占め、人民の自發原則に基いて發展せしめられることが共同綱領に明らかにされている。

何れにもせよ、博士の說かれる孫文の理想國家とさらに前述の國民政府の國大會、中共政權の政協の何れもは民間團體の起用、合作社經濟の推行において一致する點に、おのずから中國傳統の組合精神が時代の慌しい變移のうちにも生き殘つてゆく感を深くせざるをえないものがある。

中國人の政治的、經濟的生活の實態は未だ家族や幇の傳統的勢力を離れてのそれは考えられない。政黨も財閥もそれによつて起るが故に、從つてまたそれを固執する弊に陷り易く、逆にその發展が限界づけられてゆく宿命的な傾向さえ觀取される。國民黨も、共產黨もその革命意識に基づいてソ連の一黨獨裁制を模範として組織されたが、ソ連型は再現されないで、國民黨は漸次地緣的に浙江財閥に凝結することによりその崩壞を早めた。共產黨は地緣的に毛澤東を中心とする湖南將領の結びつきの傳統的構成のもとに立ちあがり、ソ連型の委員會制を交錯せしめつつ今日の連合政權を形成した。また、馬來共產黨が馬來人、印度人、中國人の三大民族の併存社會のうちにあるにもかかわらず、それ等の國際的團結とならないで、その實態は華僑のうちの海南幇を主體として構成され、共通意志を持たない複合社會を形成していることは蔽うべくもない事實である。

公的なるべき革命的政權においてすら、なおかつ傳統的構成の交錯が汲みとられる。私的な經濟生活はさらに有力にその內面に抜きさしならない幇の生々しいギルド的結合の中に息づいている。もちろん、その幇的結合の集約度は北方から南下するにつれて高まり、南北を通じて均等的に取り抜えないが、その中間の上海における實態がいかなるものであるかは本書のうちに膨大な基礎的原資料に基づいて展開されている。

ギルド的結合が內向的に硬化する場合は排斥されねばならないが、中國ギルドに望みを囑しうる點は多少とも外向的發展性を具備することにある。地方的に局限されたギルド的結合から國民的規模における組織擴大に際し、公式的な革命的拂拭によるよりも中國の實情に卽應してそのギルド的社會構造の外向的發展性は極力利用されるべきものといわなくてはならない。

自然的な血緣、地緣的結合關係の交錯する特異的な中國のギルドが清末から國民政府時代にかけ生產者ギルド、問屋ギルド、銀錢業ギルド、市商會のごとき集成ギルドにしろ何れも內向的に硬化することなく、いかに外向的に擴大發展していつたかの歷史的實證分析は博士の「上海のギルド」に間然するところなく檢討し盡されている。中國のギルドは保守傳統の前期的文化形態ではあるが、なおその前途は外向的發展性を利用する場合には洋々たるものがある。博士の說によれば、傳統を尊重するものは成功し、傳統を斥けるものは失敗するとのことである。それが今後いかに實證せられるか、その將來をトせんがためにはまず博士の「上海のギルド」に謙虛に教えをうけなければならない。

忙中に草したこの拙文が本書の內容を傳えて誤ることなきかをおそれる。文中の粗辭とともに豫め先生の寬容をこう次第である。

（日本評論社刊行、四一二頁）

執筆者紹介

根岸　佶……一橋大學名譽教授
西　順三……一橋大學助教授
中山八郎……國會圖書館中國資料課勤務
內田直作……成城大學教授